
思い出の中で君は。

館山 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い出の中で君は。

【Nコード】

N6879W

【作者名】

館山 悠

【あらすじ】

大学では彼女も居たし、容姿は悪い方ではない。一人暮らしを初めてからはいい仕事にも就けた。そして、君にも出会えた。そうやって「人生」はゆるやかな上り坂になってると思ってた。そこそこの幸せが、かけがえの無いものだった。でも、大事な事は君が全て教えてくれたね。

* 26時間*

コーヒーの熱さに驚き、上唇を舐めた。

随分と苦い。

新聞の一面は女子プロサッカーチームが世界一になったと、大きな見出しと共に躍動感の溢れる選手達の写真が掲載されている。蒼いユニフォームの右肩には日の丸が刻まれている。

紙面に目を通してある内に、カップの湯気は消えていた。

以前からコーヒーは無糖派だったが、自宅で淹れたそれが真っ黒なまま目の前にあるのはほぼ一年ぶりだ。

少し覚めた黒を一気に飲み干すと、新聞を折り畳み時間を確認した。

普段ならあと20分はこのままゆったりとした朝の時間を過ごすのだが、今日は気分が違った。

たまには、少しくらい早めに出てみよう。

過去に区切りをつけるように靴紐を強めに結び、玄関扉をゆっくりと開けた。

朝が遅くなってきたせいもあってか、いつもより陽は昇っていなかった。まだ空の端には藍色が淡いグラデーションを帯びて夜明けを彩っている。一人暮らしには少し広い部屋を出た景色が、今までと少し違って見えた。

深く、深呼吸をした。

冷たい空気が鼻孔から全身へ染み渡る。骨の髄が冷やされた気がして、少し身震いをした。

朝。

ほんの些細な出来事で、ほんのわずかに変わった環境一つで、見える世界はまるで別のものの様に思えた。

長い一日

いつもの様に山手線の朝の混雑は人の波を忙しく生み出していた。会社へは、最寄の武蔵小杉から乗り継いで40分程かけて向かう。今日は遅めの出勤だった。

ふと、かき分ける人混みの中ですれ違いざまに肩がぶつかる。

「すみません」

軽く会釈をした二十代半ばらしき女性は早々と立ち去った。慌てているようだった。朝帰りだろうか。と、また記憶の断片がふと頭を過ぎった。

彼女との出会いも……。

朝の電車は通勤ラッシュで押しつ押しされつの鮎詰め状態だ。小さくため息を吐くと、最後尾の車両へ向かった。割と空いているようだ。それでも立っている事しか出来ず、隣の乗客とは肩が擦れる程の距離だ。そのまま普段と同じだけの時間、小さな箱の中で揺られ、目的の駅へ着いた。

ここから更に数分歩いた場所に職場がある。

鞆からIDカードを取り出す。写真と名前、所属部署が記されている。

鈴木 悠馬。今年で26になる。結婚はしていないし、しばらくはする気も無い。つい最近まで同居していた彼女とは、理由があつて別れたばかりなのだ。

所属部署はセキュリティ部門。そこでネットワークエンジニア兼プログラマとして働いている。

見慣れたコンビニやビルを過ぎると、目当ての建物が姿を現した。地下が社員駐車場、一階が受付と警備室、二階にカフェテリアや食

堂があり、3階から上の階は全て全面ガラス張りになっている。

自動ドアをくぐると、IDカードを受付嬢に見える角度で揚げた。

「おはようございます」

営業スマイルというやつだ。この手の笑顔に大抵の男は頬の筋肉が緩むが、今の悠馬はそんな気分じゃなかった。

清々しいまでの朝を過ごすには一番大事なものが欠けていたからだ。

内心、全く心配していないだとか、吹っ切っただとかいう気持ちは無かった。

これから先、最早体の半分程の大きさだった大事なものが欠落した状態で、一人で生きて行けるのだろうか。あれから数週間、何度も何度も自分に言い聞かせた言葉をまた繰り返した。

最初は一人だったんだ。

元に戻るだけなんだ。

なんて事は無いはずだ。

生きて行けるんだ。

* 追憶の中に*

「おはよう。どうした？元氣無いな」

デスクに突っ伏したままの顔を覗き込んできたのは、二つ上の先輩、岡野 研二だ。

爽やかなルックスと端正な顔立ちで、同僚の女子の評判は高い。そんな事もあってか、人をあしらう事に慣れている彼には深い付き合いの友人が居ないように思えた。

仕事の終わりに飲みを誘っているのも、自分以外では見たことが無かった。

自分に心を許してくれている部分があるという事では、頼りがいのある先輩だ。

「あ、おはようございます。いや、なんでも無いですよ」
作り笑いはあっさり見抜かれた。

「仕事もしばらく顔見せてなかったし、寝不足ってわけじゃあないな。何だよ、言ってみろ」

悠馬は躊躇った。

「本当に、何でも無いですよ。大丈夫です。さ、仕事ですよ仕事」
チエアから立ち上がり岡野の肩に両手を置いて反転させた。そのまま背中を押して彼のデスクへ向かわせた。

「じゃ、溜まってたものがありますんで」
軽く会釈をすると、デスクに戻る素振りを見せながらオフィスを出た。

仕事は手につかない。

給湯室へ向かうと、職場ではあまり目立たない根岸 真美が居た。

「根岸さん、おはよう」

気の抜けた挨拶を見ると、彼女はこちらを振り返り、すぐに手元のコーヒークップへと視線を戻した。新人である彼女は課長の朝の

コーヒー番を任されている。

「おはようございます。久しぶりですね」

冷たい、というか、愛想が悪い。容姿は悪い方でもないし、化粧をすれば化けるようなタイプのだが、その空気のような存在感と常に化粧一つしない彼女の印象は薄かった。

「ああ、有給もらってたからね。正直、今も休んでる気分だよ」

まだ冗談を飛ばせる余裕があるなら、自分はそんなに堕ちては居ないのだろうと思った。

「長期休暇明けにしては、元氣無いですね」

あまり他人と視線を合わせようとはしない彼女だが、人の表情や性格、精神状態を読み取る洞察力は長けている。何故課長はこんな愛想の無い女を雇ったのだろうか、と時折悠馬は思うが、課長の人選は 職場の雰囲気やモチベーションのバランスを上手く取っている。

「ああ、少しね。嫌な事があつたから」

悠馬は気が抜けたせいか、誰にも言うまいとしていた休暇中の出来事をぼつりと零した。

「そうですね。じゃあ私はこれで」

そういつと湯気の立つコーヒーカップをお盆に乗せ、彼女はそそくさとその場を立ち去った。

午前中は、溜まっていた書類に軽く目を通して把握するので一杯だった。

大手企業からのネットワークシステム改築依頼。プログラムの作成依頼。

あらゆる書類を一つひとつ片付けていくには根気が要るが、仕事に集中出来るのも、忘れる為の第一歩だと思った。

岡野との昼食を終え、社内販売機の前でミネラルウォーターを買った。オフィスに戻ろうと振り返ると、同僚の花田 優香が居た。

「こんにちは！」

甘栗色の髪を肩まで伸ばし、ボブにしている彼女。性格は明るく、強気なところがあって、男子からの人気は高い。

「優香ちゃんか。こんにちは」

「優香ちゃんってやめてくださいよー。『ゆうちゃん』でいいです」

そうやってにつこり笑って、今まで何人も男を手玉に取ってきたのだろう。

言いかけた言葉を飲み込んだまま、彼女と数分程会話を交わしてオフィスへ戻った。

「おい鈴村。ちょっと来てみる」

課長の声にデスクを離れ、窓際の最も眺めの良い景色の見えるデスクへ向かった。

「何でしょうか」

「元気無いじゃないか。何かあったのか？」

課長の木本 一平。40代半ばになるが、鍛え上げられた肉体と焼けた肌は、大人の男という印象を相手に与える。

「大丈夫です。すみません、気を遣わせてしまってます」

「そうか、ならいいんだ。さあ、長い休みは明けたぞ。これから仕事三昧だ。頑張れ」

課長の言葉に背中を押されるようにデスクへ向かった悠馬は、それから夜9時過ぎまで残業をした。

帰りの電車の中、久々の仕事だったせいも、一定のリズムを刻む電車に揺られ、そのまま悠馬は眠りについていた。

幻と現

ホテルの窓から見下ろすガンジス川は、沈みかけた西日に照らされて赤く染まっている。

窓から射す外光は床をオレンジ色に四角く切り取って、柔らかく温めている。

「起きた？おはよう。朝まで飲んでたもんね」

背伸びをやめて、声のした方へ振り向くと、白いシルクのバスローブに身を包んだ彼女が立っていた。

今年で付き合って3年目になる彼女とは、もう結婚を意識し始めている。そんな事もあってか、たまたま重なった仕事の夏休みを利用して、二人でインドへ旅行に来ていた。

「ああ、おはよう。アレ、なんだっけ？アムラット？」

「ああ、あのお酒ね。無理して飲むんだから仕方ないわよ」
言つと彼女は、右手を唇に添えてくすりと笑った。綺麗だ。

「あのお酒はあくまでもウイスキーなんだから、気をつけなきゃ」
少し小馬鹿にされたような気がして、ムキになる。

「あの店の親父が、無理やり勧めるから悪いんだ」
すると大人な彼女は、見下すように笑った。

「あら、調子に乗るアナタが悪いんじゃない？」

互いの顔をじつと見つめると、我慢できなくなって笑い出すのはいつだって彼女が先だった。膨れた頬から息が漏れ出すのを合図に、二人して笑った。

もう半分も陽が沈んだ。淡く黒く染まり始めたガンジス川は沐浴の群集が多く、辺りは妙に神聖な空気に包まれていた。物珍しげにシャッターを押そうものなら、冷たい視線が降り注ぐ。

「だいぶ、暗くなっただね」

澄んだ空気のせいか、よく見える星空を見つめながら彼女は言った。

「うん。そろそろお腹空いた？」

「ううん、大丈夫。食べに行こうか？」

「いや、いいよ。俺ももう少しこのままでいい」

ホテルのバルコニーから見る空は驚くほど輝き、星の数に驚かされた。

「こんなに、あつたんだね」

「え、何が？」

彼女が顔をこちらに向けたままだったが、満点の星空から視線を外す事が出来なかった。

「星だよ。多いよね。日本じゃあこんなに沢山の星、見れない気がする」

彼女は再び黒いキャンバスに目を戻すと、にこやかに頷いた。

「そうだね。来れてよかった」

車内アナウンスと共に目が覚めた。

二駅も乗り過ぎたらしい。

急いでホームに降りると、駅から出て近くのコンビニエンスストアへ向かった。

「いらっしやいませ」

悠馬の存在に気付いた店員が声を上げるが、夜も遅いせいか、やまびこを返してくれる仲間は居ないようだ。

雑誌のコーナーを通り過ぎ、トイレへと向かう。

鍵をかけると、自動で流れ出す水をすくって、顔いっぱいにそれをかけた。

目を覚まそう。

もう一年になるんだ。

トイレを後にすると、コーヒーとスポーツ雑誌を片手にレジへ向かう。店員の無機質な対応。

奇妙で無言な金のやりとりを後にすると、外へ出て立ち止まった。深く深呼吸をすると生温い空気が服と肌の間に入り込む。小さな不快感を感じた。

目の前を通る一台のタクシーに手を上げると、そのまま自宅へと向かった。

始まり

「ただいま」

誰も居ない暗い部屋へ戻ると、落ち着く匂いがした。扉の鍵を靴箱の上に放り、靴を脱ぎ捨てて明かりをつける。帰りに買った夜食の Pasta はまだ温かい。ネクタイを緩め、ジャケットを脱ぐ。ハンガーに通したそれをそのままベッドに投げ捨てるようにして、そのままソファに腰を下ろした。

手元のリモコンを手に取り、テレビの電源を入れる。画面の向こうではクイズ番組が流れていた。画面の中では、可笑しい回答をしたゲストに司会者がツッコみを入れて笑いをとっている。お決まりのパターンだ。

チャンネルを次々と変えていると、ニュース番組に目が留まった。先月起こったハイジャックの報道だ。

何度もジャンボジェット機が墜落する映像がリピートされる。

「少しはこっちの立場も考えろよ」

表情を変えないまま文面を読み上げるキャスターに苛立ち、テレビの電源を切った。部屋が再び静まり返る。目の前のコンビニの袋から Pasta と野菜ジュースを取り出す。もうここ3週間程、自宅ではコンビニの弁当しか口にしていない。

「うまいな」好物のカルボナーラをすすりながら呟く。

一人だけの寂しい部屋に、孤独な言葉が反響して響き渡った。途端に、涙が零れる。

好物であるはずの食事も手が止まり、味はもう解らない。細長い麺だけをひたすらすすっている感覚だ。ふいに彼女の手料理を思い出す。彼女が得意だったのも、クリーミーなカルボナーラだった。仕上げに添える卵の黄身が麺に絡まり、絶品だった。

もう、それも食べれない。

一頻り泣くと、ティッシュペーパーで涙を拭いた。乾いた紙が一

気に雫を吸収する。

「…風呂…：…入らなきゃ」

孤独な部屋に独り言は絶えなかった。

シャツとズボンを脱ぎ捨て、ソファに投げると、風呂場へ向かった。

赤いラインの入った蛇口をひねってお湯を出す。水色のラインの入ったもう一方の蛇口をひねり、水を出して温度を調節する。

風呂を出て冷蔵庫を開ける。中はほとんど空の状態だ。帰ってから冷やしておいた野菜ジュースを取り出すと、ストローを指して一気に飲み干した。昔から好きな味だ。

濡れて頬に張り付く髪が鬱陶しい。右手で？きあげながら、肩にかけたタオルを頭に巻いた。

箆笥からシャツを取り出し、袖に腕を通す。思い入れのある黄色いTシャツだ。

このシャツを他に着ている人は一人しか居なかったし、今では悠馬を除いてこのシャツを着ている人間は居ない。彼女とのデートで行った先で作ったオリジナルTシャツだ。自作のデザインをそのまま無地のシャツにプリントする事が出来た。

『You and Me · 4ever LUV』

シャツの胸元にはそうプリントされていた。

悠馬の愛称であった「ユウ」と彼女のあだ名であった「みーちゃん」からきたその場の思いつきと、「貴方と私」という二つの意味があつたので、二人とも大切にしていた。

悠馬は改めて思った。

元カノとの思い出は捨てられないタイプだと。

中学生時代に出来た初めての恋人とも、高校が別になり次第に距離が開き始めていた時、彼女から別れを切り出され、反論の余地も無いまま関係は消滅した。

「他に好きな人が出来たんだ」

たった一言だった。

初恋という事もあって、その後3ヶ月以上も彼女を引きずっていたのを今でも覚えている。

それから何度か恋を重ね、悠馬は自分自身、恋愛は上達したと思っていた。

それは間違いだった。

あの頃と何ら変わっていないし、今回に至っては立ち直れる自信すら無い。

他の別れ方とは少し違っていたせいもあるだろう。

ベッドに横になったまま、悠馬は想いを巡らせていた。

どれくらいそうしたのだろうか、いつしかまた悠馬は夢の中へと吸い込まれていた。

* 繋がり *

河川敷を上流に向かい、手を繋ぎながら歩いている。

左側を歩く彼女がぽつりと呟いた。

「ずっと、こうしてたいな」

淑やかな朝の空気に体を委ねたまま歩いていた悠馬は彼女の言葉にはっとした。

「え？」

「ううん、なんでもない」

彼女は肩を掠める程の短めの髪をさらりと風に靡かせて他所を向いた。

「ずっと、こうやってのんびり散歩していたいな、って」

恥ずかしそうに俯いた彼女の耳は赤くなっている。

「そうだな。こういう朝って気持ち良いよな」

彼女は小さく頷くと、繋いだ手を解いて走り出した。長いワンピースの裾は淡いカラフルな花柄がプリントされている。しばらく離れて振り返ると、彼女は満面の笑みを浮かべた。まだ低い朝日が彼女の左頬を照らしている。透き通るほど白い肌が照らされ、熱を帯びているのが解った。

「ねえ、ゆう君。秘密を教えてあげようか」

「秘密？」

彼女はまた小走りで駆け寄ってくると、左手で髪をかきあげながら、悠馬の耳打ちした。

目覚まし時計のスヌーズ音も耳に入らず、悠馬は半ば空ろに白い天井を見つめていた。

あの時、何を言われたのだろう。

思い出せないままふとベッドからゆっくりと体を起こす。

チカチカと光る携帯電話を手に取ると、着信が8件入っていた。

課長が4件と、彼女の友人の藤本 沙希が4件。

悠馬はちらりと時計に目をやる。衝動的に体が跳ね上がった。

「やつちまった！今日は早番だったのに」

急いで洗面所へ向かおうとして立ち上がった瞬間、再び携帯電話の着信が鳴った。課長だ。

悠馬は恐る恐る通話ボタンを押す。

途端に課長の怒鳴り声が鼓膜を劈いた。

「何時だと思ってるんだ！」

受話器越しに頭を下げながら平謝り。

「すみません！帰ってくる直前まではしっかり覚えていたんですが、目覚ましをいつもの時間にセットしてしまっ……」

「言い訳は聴きたくない！あれほど大事なプレゼンだと言ったのに……」

課長のため息が受話器を伝って聴こえる。

「まだ、引きずってるんだよな」

悠馬は課長の意外な言葉に驚いた。婚約が決まった時こそは祝福してくれたが、普段はどちらかという堅い性格で、仕事にプライベートを持ち込む事を毛嫌いしている。

「あ……はい。すみません」

「旅行に行かせたのは逆効果だったのか？まあいい。もう少し休め。来週からはしつかり顔を出せよ」

「はい……」

受話器が一方的に切られたが、悠馬はしばらくそのまま硬直していた。

その理由は課長の意外な対応に対して、ではない。

夢の中で彼女が呟いた一言が、どうしても頭にこびりついて離れようとはしなかったのだ。

ようやく我に返り、携帯をテーブルに置いて顔を洗いに行こうと

したその時、再び着信が鳴る。

画面には藤本の名前が浮かんでいる。

「もしもし」

「あ！やつと取った！もう、平日の朝だつてのに！ずっと寝てたの！？」

「ん、ああ……まあ、うん」

悠馬は受話器の向こうの大きな声に戸惑いつつ、頭をかきながら答えた。

「まったく、だらしない……本当に、美紀が居なきゃただのダメ男だね」

彼女が笑いながら言ったのが解ったが、その言葉もまた上の空だった。

「ああ……」

暗い応対に気付いた彼女が慌てて謝った。

「ああ、ゴメンゴメン！そうだよね……辛い……よね。そうだ、今日の夜さ、そっち寄っていいかな？ちょっと話したい事があるんだ」

「今じゃダメなのか？」

「いや、今は時間無いし、なんていうか、説明しにくい事だからさ……」

「ああ、解った。夕食食っていくか？」

「え、いいの？やった！君の料理美味しいからね。久々に食べれて嬉しいよ。じゃあ」

藤本もまた、一方的に通話を遮断した。

尋ねてくる時間も言わずに、実に勝手な女だと悠馬は思った。

遅い朝食を軽く済ませると、夕食の買出しへ向かった。

孤独と希望

「お邪魔しま〜す」

満面の笑みで招かれた藤本は両手に持つビニール袋を掲げた。

「メシなら、もう作ってあるけど」

悠馬が出来立ての料理が飾られた食卓を指すと、藤本はふざけて見せた。

「君きみ〜、酒が無きゃ始まらんだろう?」

酒の力を借りて俺に何を喋らせようと言うのだ。

「まあ座って」

言つと、遠慮も無く藤本はビニール袋を料理の横に置いたまま、豪快に夕食を口へ運び始めた。

「いただきますーす! いやあ、本当に美味しいね、君の料理は」

目の前に座る女が本当に美味しそうに料理を食べる姿を眺めて、悠馬は3ヶ月前の日常に再び腰を下ろした。自宅で、目の前に座っている女性が美紀じゃないと言うのは、初めての事だった。

いつもなら、ここに美紀が……。

そう思うだけでまた熱いものが込みあがってくるのが解る。少量の塩分を含んだ水に姿を変えたそれは、瞼の裏を静かに力強く、扉を開けるように零れた。

「え、ど、どうしたの?」

藤本は慌てて箸を置き、腰を浮かせて顔を近づけてきた。思わず俯き、左手で顔を隠した。右手の箸が進むはずなど無かった。

何か悪い事した?と藤本が気を遣って背中を摩る。その優しさが、女性独特の温度が、更に記憶を掘り起こす。遂に堰を切ったように止め処なく溢れた涙と共に声を上げて悠馬は泣いた。『あの日』以

来、どこかで鍵をかけて、あるいは自己を、自我を保つために押し殺していた感情が、隙間を見つけて入り込んだウイルスのように、一瞬で全身に伝染した。顔は歪み、頬は濡れ、体は小さく震え続けている。そのまま悠馬は、底の無い程の負の感情と、追憶だらけの部屋と日常、悠馬自身の周りに形を成して存在する全てのものへ向けて、感情を放つように、ただ想いに身を任せたまま、泣き続けた。

どれくらい泣いただろうか。料理はとうに冷めてしまっていた。

「どう……する？」

流石の藤本も、滅多に見せない程自分以外の人間に気を配っているのが解った。

「ごめん、本当に。食欲無いや」

「そうだよ、私、片付けとくね」

そうやって無理に笑顔の形を顔に貼り付けたまま、藤本は小走りで食器を運んでいった。

ようやく落ち着いていたのは藤本が尋ねて一時間半が過ぎた頃だった。

「本当に大丈夫ー？」

ほろ酔い気味の藤本は頬を赤くして心配そうに訪ねた。

「ああ。なんか、悪いな。かつこ悪いとこ見せちゃって」

酔った藤本は更に咎が外れたように男女見境なく近付いてくる。

本人に自覚があるかどうかは解らないが、二人は部屋を移し、テーブルを挟んで、向き合って座っていた。悠馬の言葉に、彼女は立ち上がりふらふらとテーブルを回って近付くと、隣で俯く傷心の男の肩を抱いた。

「そんな事言わなくていいよ。誰だって辛いのは同じだもん。私だってこうして、お酒に逃げるしか無いんだし」

「そう……なのかな」

「で、話したい事があるって言ってなかった？」

切り出したのは悠馬の方だったが、彼女はすっかり忘れていた様子だ。

「あ！そうだ、話があったんだ！すっかり忘れてたよ。久々に悠馬君の家に来たもんだから、くつろいじゃったわ」

少し照れた様子で笑う彼女は、容姿は悪くなくスタイルも良い方だった。しかしその歯に衣着せぬ物言いと、男勝りでカジュアルな性格やファッションのせいか、男の噂は聴いた事が無い。

「私もまだ、信じられないんだけどね」

一体何の話をするのだろう、と軽く酔い始めた頭を揺り起こすように冷たい水を一気に飲み干した。

「うん。それで？」

「あのね……〇県にある、『御神之御膝みかみのおひざもと元』って言われてる山、知ってる？」

* 確信 *

信じられないような話だった。

霊的なものや超常現象の類をあまり信じていない悠馬は、藤本の話而易々と真に受けていいものだろうかと思つた。

しかしそれと同時に、不確定な未来と残像の残る過去に区切りをつける唯一の希望に縋りたいと思う気持ちもあつた。

「まずは行かなきゃ解らないでしょ」

そう言つて無理やり上司から休みを取らされた。

藤本が酒を飲みに来た三日後の事だった。

その日は平日の真昼という事もあつて、都会から郊外へ向かう電車は空いていた。

「やつぱりまだ、信じきれてない？」

俯き気味だった顔を覗き込むようにして藤本が話しかけてきた。

同じ車両には二人を含め5人しか乗っていない。仲の良さそうな老夫婦と、スーツのジャケットを脱ぎ、ネクタイを緩めた若い男。仕事帰りだろうか。

「信じるも何も……俺はこつこつという類の話は」

小刻みに頷き、彼女は言う。

「解つてる。前にも聴いてるもんね。あんまり信じないほうだつて。でも悠馬君、あのままじゃずっと抜け殻みたいに過ごしてたでしょ？例の山に行つて、何か起こつても起こらなくても、それが一つの区切りになると思うよ」

彼女は優しい。友達の彼氏という事もあつてか、良くしてくれる。何度か気があるのでは無いかと疑つたが、彼女は根っからの一途な純情娘で、付き合つて5年になる彼氏と同棲中だ。

この日も二人で旅をする事に、彼氏に悪いけどと何度も口にして

電車に乗って既に3時間が過ぎていた。

老夫婦と若いサラリーマンは同じ車両のままだ。

「何か、音楽でも聴こうか？」

そう言って藤本が鞆から取り出したのはiPod。

イヤホンを差して肩耳ずつはめる。端から見れば恋人同士だろう。端末から流れてきたのは悠馬の好きなカナダのバンド、Nickelbackのバラード曲。

美紀との想い出の曲でもある。

「これ、ダメかな？ほら、美紀と……」

思い出したように藤本は曲を変えようとするが、悠馬は止めた。

「いや、いいよ。最近聴いてなかったし。久しぶりに聴かせてよ」
半時間程、Nickelbackの曲を流していると、目的の駅が近付いてきた。

同時に心拍数も上がっているのが解った。

これから起こるかもしれない僅かな希望に賭けている自分が居るのが解る。

「そろそろだね。降りる準備しなきゃ」

右耳から流れていたBGMが終わりを告げると同時に、電車の速度が落ち始めた。

やがて扉が開いてホームに降りると、そこは都会から一步離れた郊外とは思えないほど寂れていた。

車掌がホームの端に居るだけで、その空間はあまりに薄く、どこか冷たく感じた。

視線の端に目をやると、老夫婦とサラリーマンも降りていた。目的が一緒とは思えないが。

駅を出ると、町全体がどこか不思議な雰囲気を感じているのを感じた。

建物や風景がおかしい訳では無いし、人の気配も少ないわけでは

無い。

しかし、どことなく感じ取れる『気』のようなものは悠馬の鳥肌を浮き上がらせた。

「なんだろう……この街」

藤本をちらりと見ると、彼女の横顔にもその雰囲気を感じ取っている様子が見られた。

「なんだか……違うよね、他とは」

「とりあえず、地図か交番捜そうか」

目的の山を捜すため、二人は町を散策した。

軒並み住宅街ばかりで、小さな駄菓子屋がぽつりぽつりとあるばかり。街で見かけるような大型スーパーやショッピングモールはどつやら無いようだ。

しばらく歩いていけると、庭の畑であろう土地を耕す初老の男性の姿が見えた。

目当ての交番も、地図が売ってあるだろうコンビニエンスストアも見つからなく諦めかけていた二人は、その男に声をかけた。

「あの、すみません」

振り返った男性の顔は汗だくだった。農作業は相当な体力と気力を必要とするせいだろう。

「なんだい？あれ、あんた方、ここの人じゃあないだろ。見かけない顔だ」

小さな街のせいか、男性の話によると街中親戚みたいなもので、大体の顔と名前は覚えているらしい。改めて田舎と都会のギャップに驚かされる。

「で、聴きたい事って何じゃったかい？あんた等、観光で来たんだっけか？」

「ああ、実は…僕等『御神之御膝元』っていう山を探してるんですが」

山の名前が出た瞬間、ずっと笑顔だった男性の顔から一瞬笑いが

消えるのを見たが、再び何事も無かったかのように彼は言った。

「いや、知らないなあ。ゴメンよ。どっか、別の山と間違っただじゃねえか？」

「そうですか……。ありがとうございます。もう少し探してみます。じゃあ」

そう言っただけ二人はその場を離れると、暗くなり始めた街で、人の多い場所を探した。

「さっきの人、山の名前出した時にさ」

薄々感じ取っていた怪しさを口に出したのは藤本の方だった。

初老の男性と別れて2時間程、道行く人に片っ端から声をかけた二人だったが、街の住人は「知らない」の一点張り。

山を探そうかと考えもしたが、街全体が盆地のようになった谷の部分があるので、四方が山で囲まれている。

「でもさ、あれは絶対何かを隠してるよ」

藤本と意見は同じだった。街の人間は何かをひた隠しにするように山の存在を他に漏らすまいとしている。なんとしても山の存在を、言い伝えの確信を探らねば。

声

声が聴こえた気がした。

目が覚めたのは12時前だった。遅い朝だ。

藤本は既に出かける準備を終わらせていた。

「遅かったね、おはよう。あの……いや、早く準備してきなよ」

「え？ああ……わかった」

前日歩き過ぎたせいか、足には筋肉痛が残っていた。デスクワークばかりの職業なので、運動不足が沁みる。

冷たい水で顔を洗い、重い瞼をこじ開ける。

宿のロビーにある小さな喫茶店で軽いブランチを済ませると、二人はその場を後にした。

最後に聴いた初老の男の話によると、どうやらそれなりの覚悟が必要らしい。同時にリスクも。

なににせよ、周辺一体の集落に聞き込みをする過程では、藤本が最初に持ち込んだ話を疑うことが出来なかった。

宿を後にして半時間ほど北東の山に向かって歩いた。

前方に深い緑を抱いた山の麓が見え始めた。といっても、入り口らしいまともな道は無く、地域一体を囲むようにして森があるので、どうしても最初は森をかき分けて進むことになりそうだった。

「うわ、なんか怖いね」

藤本の言葉に悠馬は頷いた。

全体を森で囲まれているせいか、最初に訪れた瞬間から街に少しおかしな雰囲気を感じ取っていた理由が少し解ったような気がした。その、ある種隔離されたような環境で、集落の人間も、森の生態系も、独自の進化速度を続けているようだった。

「そういえばさあ、長く眠れたんじゃない？」

森に入りながら藤本が言う。

「そうだな、なんつーか……暇だった」

「それだけ？ テレビもほら、東京の番組映らないしき、逆に映ってる人も知らない人ばかりだったよね」

言われてみれば、そうだった。

テレビ局らしい大きな建物は見当たらなかったし、放送している番組にもどこか違和感を感じた。人の顔に靄がかかったような奇妙さを覚え、目を逸らしたのだ。

まあ考えてもキリが無い。

無駄な体力を消費しないように口数を減らしながら歩いた。

森の中は予想以上に鬱蒼としていた。

顔にかかる蜘蛛の巣や枝を払いながら、足場の悪い地面を歩いて行く。

「やっぱり……不安？」

十分程歩いただろうか。藤本の声で後ろを振り向くと、もう街の姿は見えなくなっていた。

「不安……なのかな？ まだよく解らない」

曖昧な返答にまた会話が途切れる。森に入ってからはずっとこの調子だ。

ただ二人、黙々と森の奥へ進んでいる。

「方角は、当たってる？」

肩越しに藤本に尋ねる。方位磁石を確認しているようだ。

「大丈夫だよ。まともな地図じゃないみたいだけど、多分もう少し歩けば山道が見えてくると思う」

「ありがとう。行こうか」

少し高くなつた岩場の部分を先に登り、藤本の手を取る。疲れているせいか、彼女は頬を少し赤らめている。

更に十分程歩いた頃だろう、ようやく山道らしきものが見えてき

た。相変わらず足場は悪そうだが、落ち葉が両端に退かされ、一人が歩ける程度の幅が作られている。

季節のせいもあってか、山は生き生きとした緑で染められている。僅かに落ちた葉が褐色に色づき、山の風景にアクセントを加えている。

しかしどこか不思議な事に、虫は一匹も飛んでいなかった。

山道を歩き始めて半時間。山小屋らしき小屋が視界に入った。二日に渡り続いた長時間の運動で疲れきっていた足を休ませるには丁度良い場所だった。

「少し休んで行こうか」

悠馬は山小屋の中を確認する。

誰も居ない事を確かめると、藤本と二人、小屋の中に敷かれた畳に腰を下ろした。同時に悠馬は仰向けに寝そべる。

「ああ。疲れた」

会話も無いまま、二人は溜まりきった疲れと街の違和感から開放された感覚になり、いつしか眠りに落ちていた。

ディナーを予約していたのは悠馬の方だった。

付き合って半年の記念日で、仕事も調子に乗り始めていた悠馬は、順調に訪れる幸せの前ぶれを一つひとつ噛み締めていた。

「いい店でしょ。予約取るの大変でさ。ようやくキャンセルが出た所に滑り込んだんだ」

街全体を見下ろす高層ホテルの最上階にあるレストランで、二人は窓側の席に座っていた。店内には淡いジャズが静かに響き渡り、優雅な食事のひと時を演出している。

「凄い。夜景、綺麗だね」

見下ろすと街中のネオンが小さな口ウソクの火のように輝いてい

た。

食事を済ませ、ジャズに耳を傾けながら、甘い余韻に浸る中、悠馬は切り出した。

「もう、半年だな」

はっと目を開け、美紀は優しく微笑む。

「そうだね。お互い忙しいせいかもしれないけど、あっという間だったよね」

「もう仕事もさ、だいぶ慣れてきたんだ。だから……」

緊張で口ごもる悠馬に、少しからかうように美紀は聞き返した。

「だから？」

「だから、ほら……一緒に暮らさないか、って……」

言った途端、全身が熱くなるのが解った。これほどまでに自分が好意を寄せる異性に対して弱かったのかと思ひ知らされる。

刹那、美紀は少し悲しそうな目をしたが、すぐに笑って返した。

「いいよ」

その一言を待ち望んでいた。一気に緊張のほどけた悠馬の顔の筋肉は綻び、しばらく恍惚な表情を顔に貼り付けたままだった。

その一週間後だった。彼女の本音のメールが届いたのは。

目覚め

冷たい空気による身震いで目を覚ましたのはまだ夜明け前だった。小屋には家具らしい家具など何も無かったので、腕枕をして悠馬は眠っていた。普段と違い、硬い畳で眠っていた体中が軋むように痛む。藤本はまだ夢の中に居るようだ。

はあっと、深く息を吐いた。白く色を変えたそれは、溶けるように大気に滲んで行く。

どうしても、思い出せない。あの時のメールの内容が。

悠馬はポケットから携帯電話を取り出し、Eメールの受信ボックスを確認する。が、不運な事に、携帯電話の画面は真っ暗になったまま。電源が入っているのは確かだが、故障のせいか、液晶は少しも光らない。

携帯を投げ付けるようにその場に置くと、悠馬は小屋の外へ出た。薄く白い靄が山全体を包んでいる。

まるで別世界に来たようだった。

おかしい。何かがおかしい。

深く深呼吸をすると、鼻の奥がツンと冷え、体が芯まで凍るような感覚を覚えた。

小屋の戸は軋み、不快な音を立てた。それと同時に、藤本が目を覚ました。

「ごめん。起こしちゃった？」

悠馬はそばにあった薄い布を横たわる藤本に被せながら言った。ありがとう、と彼女はそれを受け取ると肩に巻きつけた。同時にふと、ハツとした表情でこちらを見上げた。

「ちゃんと他人を気遣えるようになってきたね。少しは成長したって事かな？」

からかうように、彼女はクスクスと笑った。

もし別の人生を歩んでいたら、悠馬は彼女とも上手くやっていったかもしれない。それほど他人から見ても仲のいいカップルのようだった。

「落ち着いただけだよ。疲れてないなら、行こうか」

「そうだね。もうだいぶ眠ったし。準備するものも特に無いだろうから」

朝の山は嫌と言うほど静まり返って、生きるものの気配すら感じさせなかった。

靄も次第に濃くなり、数メートル先しか目視出来ない状況だった。やがて、朝日が強くなり始めるのと同時に視界も開けてきた。振り返ると、相当な距離を歩いていたことが解る。

それでも二人はひたすら歩き続けた。それが見えたのは昼前の事だ。

靄はすっかりと無くなり、前方にお社が見えたのだ。

人の手入れ等行き届いていないような、随分を古ぼけた社だ。

「着いた……な」

藤本も息を切らしながら答えた。

「やつと……だね。でも……人、居るかな」

「とりあえず、中を見てみよう」

二人は再び歩き出し、苔と落ち葉でいっぱい石段をゆっくりと登り始めた。

やがて少し開けた境内に出ると、お社の裏手の方から、カサカサと音がするのが聞こえた。

見つけたのはお社の住職らしき人物だった。綺麗に頭を丸め、袈裟にも皺一つ無い。

カサカサと聴こえた音は、竹箒で落ち葉をはく音だった。

「あの、すみません」

声をかけると、彼は驚く様子も無く、ゆっくりと振り返った。

細く切れ長の目は、悠馬の見られたくない部分を見透かしているようだった。

「やつと着いたね。さあさ、中へ入り」

悠馬と藤本は顔を見合わせた。

まるで二人が来るのを知っていたような口振りで招き入れた僧はどこからともなく、熱いお茶を差し出した。

「疲れたろう。長かったね。でもそれは、山道の距離じゃあ無いんだよ」

決して住職は悠馬を目を合わせて話そうとはしなかった。会話中もずっと、悠馬の胸の中心辺りを見つめていたのだ。

茶の啜る音だけが響き、しばらくの間沈黙が続いた。何から切り出せばいいのかと二人は頭を巡らせていたが、異様な雰囲気と坊さんの視線に二人の思考は飲み込まれていた。

お社の中は、予想以上に片付いていて、手入れの行き届いていないように見えた境内や石段とは違って荘厳で神聖な空気が漂っていた。

「ここはね、そういう空気を纏った人達が導かれやすい場所なんだよ」

住職はゆっくりとした口調で語り始めた。二人は頭を巡らせていた様々な思考が取り除かれるような澄んだ声に耳を奪われた。

「君もまた、愛する人を亡くしたね？」

住職は部屋の奥にある仏壇に歩み寄ると、肩越しに悠馬に語りかけた。

「え……はい。それで、この噂を聴いて」

「そうか。まあ、肩の力を抜いて、気軽に構えていなさい」

悠馬はその言葉に張っていた緊張の糸を解かれるような力を感じた。あつという間に落ち着いた悠馬は住職の背中を見つめていた。

すると、住職は持っていた巻物を広げ、読経を始めた。

それが終わるまでの間、悠馬と藤本は不思議な音楽を聴いている

ようだった。

住職の澄んだ声は頭の中に直接響くようで、一定のリズムを刻む読経は聴く者の心の内を露にするようだった。

読経が終わった後の住職は少し汗をかいているように見えた。

振り返ると、住職は藤本の方を向いたが、やはり彼女の胸の中心辺りを鋭くじつと見つめるように語った。

「君は、強いね。覚悟は出来ているね？」

彼女はゆっくりと頷くと、悠馬に目配せした。

悠馬は頷き、鞆の中からネックレスを取り出した。美紀と行った旅行先で買った、お互いのイニシャルを象った銀のネックレスだ。

悠馬は自分のそれを、藤本は美紀の分を静かに首にかけた。

次第に思考を遮られるように、頭の中にノイズが走るような感覚に捕らわれた。ちらりと藤本の方を見ると、彼女も苦痛に表情を歪めていた。

住職は二人に優しく声をかけた。

「痛いですか。でも我慢しなさい。無理やり呼び戻すというのは、とても危険な方法なのです。下手をすれば、彼女本来の意識は沈んだまま、元に戻る事は無いでしょう。悠馬君、落ち着いて事を運ぶのです」

ノイズの中で確かに聴こえた住職の声だけが幾度もしびりトしていたが、次第に強くなるノイズに二人は飲み込まれていった。

・終わりの始まり

『当便は、羽田空港発、フランス・パリ経由、イギリス・ロンドン行き我便となっております。ご搭乗の際は、くれぐれもお忘れ物のないよう、ご確認下さい。尚、搭乗開始時刻が間もなく……』

機内アナウンスが流れている。

鞆から愛飲の緑茶を取り出そうとして、機内に飲食物が持ち込めなかつた事を思い出す。

「すみません、お水下さい」

通りがかったキャビンアテンダントに声をかけた。

美人だ。

彼女はにこやかに微笑むと、聴こえるか聴こえないか大きさで、しかしはつきりと聞き取れる返事をした。他の客への配慮も行き届いている。

ふと、美紀は客室乗務員の衣装に目を向けた。ピタリと引き締まった紺色に、色とりどりのスカーフ。

これだ。そう思いつくや否や、美紀はペンとスケッチブックを取り出した。新しいウェディングドレスのデザインだ。元あつた下書き用のドレスの絵に修正を加える。花嫁の首の辺りにスカーフのような薄いレースを巻く。淡い花柄付きだ。

悠馬から勧められたのは悩みに悩んだ末、上司も推しを諦めようとしていた頃だった。

ロンドンで開催される、ウェディングドレスデザインの披露会。その名誉ある大会に招待されたのは、日本からは新進気鋭のデザイナーと評判の高い美紀だけだった。世界中の有名なモデルが、自分のドレスを着てくれる。華やかな道を真っ直ぐに歩きながら。その姿を想像するだけで、今にも心拍数が上がり始めようとしている。

「行つてきなよ。こんなチャンス、滅多に無いんだ」

悠馬は付き合って2年半になるある日、二人で住むマンションのベランダでそう言った。

しばらく、言葉が返せなかった。嬉しいような寂しいような複雑な心持ちと、この頃の美紀を取り巻く様々な出来事が頭を駆け巡っていたせいだ。

ようやく出た言葉はたった一言だった。

「ありがとうございます」

それだけが精一杯だった。

機体が浮き始めると、気圧が鼓膜に影響を与え始めた。聴覚に違和感を感じる。窓から外を見下ろすと、街は既にミニチュアサイズだ。

時刻は昼を過ぎたばかりだ。先ほどとは別のCAが機内食を運んできた。

「お食事はいかがですか？」

美紀はすっかり見下ろせる雲の白に心を奪われていたが、CAの呼び声で我に返った。

「あ、すみません。サラダはありますか？」

「はい。ドレッシングはいかがなさいますか？」

「ごまだれでお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

CAはその場でサラダの用意を始めた。プラスチックのカップに入ったサラダだ。結構なボリュームがある。

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます」

美紀はサラダを受け取ると再び窓の外に目をやった。自分と悠馬の住む町が、もう米粒ほどの大きさになっていた。

「仕事頑張ってるかな」

美紀が上司からの誘いを躊躇った理由はいくつかあった。

一つは、幼い頃から抱える持病を悪化させない為だ。病いを患う美紀の肺は、環境の変化や気圧の変化によるストレスに弱い。常に薬を常備していなければならぬのだ。そして、その病気の進行度合いも、近頃は上がっていたのだ。

二つは、3週間のスケジュールでの往復チケットにあつた。大会への申し込み、参加者顔合わせを兼ねた打ち合わせ、リハーサル、本番。

その全てを含んだスケジュールとなつていた。仕事も特別有給扱いなので問題は無いのだが、ロンドンに滞在する3週間の丁度半ばに、悠馬との交際が3年目になる記念日があつたのだ。

そして悩んだ結果、彼女はあるサプライズを用意した。その準備に手間取つた事もあつて、出発は最初の大会申し込みに間に合うかの瀬戸際の時間になつてしまつた。

サプライズ好きな彼女は、今までも悠馬といくつもの想い出を作つてきた。

一年目の記念日の2週間前、悠馬の誕生日。仕事が波に乗つていた彼は、自分の誕生日すら忘れてしまつていた。前日に、明日は何の日かと尋ねると、間の抜けた表情を見せたのを今でも覚えてる。そして誕生日当日、美紀は上司に休みをもらい、彼の好きなニット帽を買いに出かけた。

午前中に2時間もかけて選んだ甲斐あつて、悠馬の気に入りそうな青黒いニット帽を手に入れた。

しかしサプライズはこれで終わりではない。

悠馬の帰宅する2時間前から、夕食の支度をした。食卓に並んだのは彼の好物であるオムライスやカルボナーラ、ハンバーグ。

そして彼の好きなカナダのロックバンドが手がけたバラードナンバーをBGMに流した。

そうして彼の帰宅を待つたのだ。

仕事の楽しさに意気揚々と帰宅した彼は、その息を飲むような世

界に言葉を失った。

その日の夜は忘れられないものとなった。

悠馬との思い出を振り返っていると、ふと彼の匂いを感じ、首に巻いたスカーフを解き、手に取った。受けた恩はそれ以上の愛で返す。そんな彼からもらったサプライズ返しのプレゼントだった。

甘く蕩けるような、愛と呼べる思い出に体を半分浸らせたまま、食べかけのサラダもそのままに、美紀はいつしか眠りについていた。夢の中でも、彼を想いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6879w/>

思い出の中で君は。

2011年11月13日19時56分発行